

より良い実習及び実習指導に向けた取り組みとは

—学生のような「選択」に着目して—

染谷雅広*

With the action for better practical training and the practical training guidance.

—Focus on various choice for the student.—

Masahiro SOMEYA*

【要旨】

保育実習及び幼稚園実習において学生が経験することは多岐にわたる。同時に、実習に臨む学生は、実習先の「選択」や子どもとのかかわりの中での「選択」など、様々な「選択」が求められる。その一方で、「選択」までの過程及び「選択」後のかかわりについては、学生の個人差以外にも、大学間による指導の差、受け入れ先の保育現場並びに実習を担当する先生方の差など、実習を行う学生を取り巻く環境によって大きく異なる。そこで、本報告では学生の様々な「選択」に着目しながら、筆者の保育現場側及び養成校側の経験に加え、【実習指導室】での対応も含めた多方面からの実践報告をまとめた上で、より良い実習に結びつくための取り組みについて考察を行った。その結果、保育現場側と養成校側の共通理解や一定の基準作り、【学生を育てようとする視点】を持った指導の必要性などが導出された。

キーワード：「実習」「選択」「振り返り」

はじめに

保育実習及び幼稚園実習（以下、本文では双方を合わせて「実習」とする）の中で、学生は保育現場でしか味わうことができない様々な子ども（又は保育者）とのやりとりを通じて、葛藤や揺らぎ、悩みを経て、本人なりの最善の「選択」をした上で実践し、その結果を振り返ることで新たに自己の課題や目標を導出し、次の保育に臨んでいく。例えば、以下のような事象から考えてみる。

天気の良い日に、担任の先生が多くの子どもたちと水遊びを楽しんでいるとする。しかし、子どもの興味はそれぞれ異なるため、大半の子どもが水遊びを楽しんでいても、砂場や複合遊具などで遊ぶ子どももいる。実習生

としてその場にいた場合、水遊び又は個別に遊んでいる子どものいずれかとかかわる（選択①）。その後、担任の先生が片付けの声掛けをするが、子どもの中にはまだまだ遊びたい気持ちが続き、片付けに気持ちが向かないこともある。その際、傍にいる実習生は自分の持ちうる様々な働きかけを試みる（選択②）が、実際には実習生の働きかけでは次の行動に移れない子どもも多い。そこで、実習生は、次の選択を迫られる（選択③）。

選択①～③には正解はないが、実習生の選択によって子どもへ与える影響は大きく異なる。また、選択③で躊躇く実習生が多く、上手な働きかけができなかったり、どうしてよいか分からず担任の先生に助けを求めたりと、

いくつかの行動が考えられる。このような保育での様々な場面に対して、実習生は前記した自らの選択及び言動を1人又は担任の先生等と共に振り返り、時に助言をいただくことで翌日の保育に向けての糧としていく。

上述した事象のように、実習生なりの保育のPDCAサイクルを保育現場で経験するには、保育現場の適切な指導のみならず、送り出す前の実習指導の段階でいかにその視点を持って臨めるように教授できるか、さらにはその前提として望ましい実習先を学生自身が「選択」できるように援助できるかが肝要となる。

幸いにも、筆者はこの全ての立場において学生とのかかわりを経験している。そこで、今回の実践報告では、実際に実習生を受け持った経験及び実習先を決定する実習指導室での学生及び教職員とのやりとり、実習指導の授業の中での経験など、多方面からの報告をまとめた上で、学生の「選択」に寄り添うことができる実習及び実習指導について考察を加えることとする。

1.【保育現場側からの実践報告】

筆者は都内にある私立幼稚園で13年勤務をしていた。その間、4年生大学、短期大学、通信大学、さらには社会人経験者も含め、幅広く実習生を受け入れ、その指導に当たってきた。また、この園では実習生の指導については基本的に担当の先生へ一任されていた。とはいえ、それほど大きな園ではなく職員室でのやりとりは自然と聞こえてくるため、実際には先輩の先生方のやりとりを見聞きした上で、これまでの諸先生方の指導を参考にしながら、自然と園の実習指導が継承されていったように思える。そのような状況の中で、各先生方が学生を指導する上で共通して心掛けていた点は、(指導案などの)計画の段階から「学生の主体性」を重んじ、やってみた結果どうであったかを振り返る機会(時間的にも雰囲気としても)の担保である。また、前記した多様な実習生の受け入れもあってか、実習開始時の学生の知識・技術面、ボランティア及びアルバイト経験などによる個人差が大きく、学生の状況に合わせた指導も心掛けてきた。一方で、先述したように基本的には担当の先生へ実習生の指導が一任されていたため、受け持つ先生によって指導に差が出ていた点も否めない。

上述のような保育現場で実習生を受け入れてきた経験に加え、養成校側で学生と携わる立場も合わせながら、実践報告を3つの項目にまとめ、それぞれの課題を列挙する。

①振り返りの時間について

平成29年告示の3法令では、それぞれ文言は異なるものの、日々の保育の振り返りを中心にした実践後の取り組みの重要性が記されており、保育者を志す実習生への取り組みや指導においてもその重要性は当てはまると考えられる。当園でも、実習生が十分に振り返りを行えるよう、時間的にも雰囲気としても配慮を心掛けてきた。その一方で、振り返りを重視する中で別の問題が浮上した。具体的に述べると、当園ではその日の保育が終了した15時頃に振り返りの機会を設け、今日の保育についての質疑応答の時間を30分程度設けていた。振り返りの時間では、実習生が自ら「選択」して子どもとかかわったことに対する反省や迷い、葛藤などが多く聞かれ、必要に応じて助言を加えてきた。ところが、実習生はその反省を経てその日の日誌を記入するため、【一日の振り返り】や【事例と考察】の欄に反省の内容をそのまま記載する実習生が多く、改善の余地はないかと気になっていた。そこで、先生方との協議の末に一日の振り返りを当日にせず、実習生はまずその日の日誌を記録し、翌日に日誌を提出した上で保育の振り返り(実際には昨日の保育の振り返り)をするという試みを実施してみた。

結果としては、利点と不利点の双方が浮上した。利点は、日誌には本人の葛藤や悩み、自分なりに「選択」した言動の結果などが、ありのままに記述されるようになった点である。この記録をもとに翌日担当の先生が日誌を見ながら必要な助言を加えることで、自分の中でまとめたことにより新たな示唆が加わり、次の保育に向けた意欲が高まっていくという一連の過程を大切にできた。一方、不利点としては、その日の保育を行った後での前日の振り返りのため、会話の内容に前日と当日の保育が混在してしまう点が見受けられた。

以上の利点と不利点を熟慮した上で、最終的には当日の振り返りの時間を重視すること、つまり、学生が子どもとかかわった様々な「選択」を共に振り返ることを最優先にしたのである。その上で、日誌の記入に関しては「先生と振り返りを行った内容については、参考にするもののそのまま記録しない」ことを事前に実習生へ伝えることとした。

上述した実践報告の他にも、実習先では学生にとって何を重視した指導をすればよいのか判断に悩む事例は多い。今回の報告においても、翌日に振り返りの機会を設けた試みは、学生自身がはじめに保育を振り返ってまとめ上げ、その記録に沿って担当の先生が共に振り返り、必要に応じて助言を加え、実習生は其中で新たな示唆を得て次の保育に臨むという過程は良い取り組みであ

った。しかし、その日の保育があつて、その場面を思い描いている中で前日の振り返りを行うことは、実習生としては高度なことであり、むしろ困惑させてしまう方が大きかったのである。後述する、学生が「選択」できない2つの事柄とも併せて、保育時間外の活動で何を大切にしていくなすべきかについては、保育現場側としてもさらなる検討の余地がある。

②実習生に経験してもらいたいことの優先順位

養成校の立場になって、実習を終えた多くの学生から「園でたくさん掃除をさせられた」「保育が終わると教材準備ばかりしていた」との声が聞かれる。確かに、筆者がいた園でも年間の実習生受け入れ計画に基づき、実習生にお願いしたい内容（主に教材準備）をある程度まとめておき、保育時間外の時にお願いしていたことがある。もちろん、そのような準備が何のためにあるのか、保育における環境構成の視点で捉え、保育者の準備の重要性を理解した上で実際に体験することは必要である。また、子どもとかかわらない時間の活動に対して、実習生自身がどのように受け止めているかについては個人差も大きい。その一方で、受け入れる実習先としても、学生の様子や受け止め方に応じながら掃除や教材準備の時間を有意義に過ごせるための配慮が求められる。例えば、保育者同士で掃除の時間を有意義な会話の時間にしている事例もあり、前記した取り組みは実習生と担当の先生間でも可能である。また、保育以外の活動の時間を自己の振り返りの場や翌日の保育構想ができる機会と捉えられるように声をかけるなどの対応も有効である。その一方で、このような細かい実習生とのかかわりについては、園あるいは現場の先生の裁量に委ねられている現状が示唆されるため、実習の中身に関する一定の基準を設けることも考えられる。例えば、幼稚園実習であれば標準時間の4時間の他に必ず学生との振り返りの時間を30分～1時間程度設けること（ただし、それは掃除や保育教材準備等の作業をしながらでも構わない）など、養成校側から保育現場に実習依頼をかける際の文言に加えるなどの可能性も考えられる。

③時系列中心の記録の書き方の指導

これもまた養成校の立場になってからよく聞かれる内容であるが、「（実習の後半になっても）毎日3～4枚も時系列の記録を書いた」「日誌は（翌日の朝又は夕方）に下書きのチェックをしてもらい、（翌々日に）本書きを再度提出するため、日誌の記入にかなりの時間を要

する（睡眠時間が僅かになってしまう）」など、日誌に関する声が多く聞かれる。しかし、学生の報告例とは反対に保育現場で様々な養成校からの実習を受け入れていると、多様な様式があることに驚かされた。そして、当園では基本的には各養成校の様式に沿って記録してもらい適宜指導を加えてきた。

日誌の記入についても、前半の【観察実習】であれば各園の流れを把握するために細かい時系列の記録を残すことは必須であり、最近の実習生においては日本語の指導（誤字や脱字、文章の構成などの指導も含む）に費やす割合も多く、その点も踏まえた細かいご指導をしていただける点はむしろ感謝しなければならない。一方で、後半の【参加実習】においては、子どもとのかかわりの中から学んだことを深く理解し、それを記録にまとめる【事例と考察（エピソード記録）】が中心になっていく必要があると考えられる。そのため、本学のように後半にあらかじめ時系列の欄を短くし、その分事例と考察の記入欄を多く設けた様式で保育現場にお願いする試みは非常に有効である。一方で、保育現場の指導も多様であるが故に、大学の指導側も最終的には園の指導に合わせて記入するようにと、学生に曖昧にしてしまうこともある。さらに、当園では時系列の記録の指導に先生方による個人差が見受けられたが、おそらく当園だけが例外ではないだろう。

上記の課題を勘案すると、現場によって多少の違いは認めつつも、一定の記入の基準を設け、養成校側も保育現場側も共通認識でいることが必要であると考えられる。特に、実習の後半は学生と園の子どもとの関係も深まり、かかわりが持てると同時に非常に魅力的なエピソードも産出されるため、その大切な実習生の体験に対して、自身で「選択」しかかわってみてどうであったのか、その結果どのような反応があったのか、それは実習生にとってあるいは子どもにとってどのような心の動きがあったのか、それは次のかかわりにどのように役立っていくのか。こうした実習先でのエピソードから生じる葛藤や揺らぎを大切にまとめられる記録の充実及びそれに対する適切な指導が求められるのではないかと。

以上のように、保育現場及び養成校側双方の視点から実習指導に関する実践報告を3点に分けて記してきた。その中で共通して求められるのは【学生を育てようとする視点】を持った指導の必要性であり、保育現場側と養成校側の共通課題であるとも捉えられる。つまり、園による差や大学間での指導の差がこれ以上広がるよう

あれば、前記した双方が学生のための実習の在り方について一定の基準を設ける必要性も十分に示唆される。

2.【望ましい実習先の選択とは】

厚生労働省が示す「保育実習実施基準」にも記されているように、学生にとってより良い実習となるためには、実習先の「選択」が重要である。しかし、この実習先決定までの過程については大学間の取り組み方に差があり、大学それぞれの体制に応じた課題が見受けられる。そこで、本学の【実習指導室】での学生と教職員とのかかわり（今回は幼稚園実習に限定する）を参考に、学生にとって望ましい実習先の選択について考えてみる。はじめに本学の実習先選択から依頼までの流れを簡潔にまとめ、最後に考察を加えることとする。

本学の実習先の選択については、2年次の春先に行っている。1年次の授業での学修を踏まえて、実習担当教員によるガイダンスの機会を設け、その内容や諸注意事項を理解した上で学生は本格的に実習先を探し始める。本学の【実習指導室】は単に書類の提出先にとどまらず、学生の実習先選択に関する様々な援助の場として寄与している。例えば、過去の実習先の資料が閲覧できたり、実習指導員が学生の相談にも常に応じたりできる場となっている。実習先を選ぶ際の学生の主な基準は、通いやすさ、保育内容、自身に関連のある園など多岐に渡るが、候補として検討している実習先の保育内容を【実習指導室】で丁寧に調べている学生も多くみられる。ガイダンス後、2年次の4月末から5月初めにかけて、学生は実習先の希望園を提出する。その際にも【実習指導室】では実習担当教員及び実習指導員による慎重な対応が行われている。通う時間、希望園の保育内容調査、過去の実習実績などを総合的に確認した上で、本人の意向を踏まえながら共に考え、実習先選択の補助を担う。

この一連の過程は、実習指導員として携わっていた筆者の立場から見ても、非常に特徴的でありその有用性も大きいと思われる。その後、学生は自ら選択した園に直接連絡をし、実習を依頼する。学生が電話での依頼に困難を覚える時には、実習指導員等が対応（練習の機会を設ける）できる体制も整っている。園の諸事情により、場合によっては実習先から断られたり保留になったりと、精神的負担を強いられることもあるが、その都度実習担当教員をはじめとした教職員が、学生に寄り添いながら次の選択先へ依頼する手筈を整えていく。こうして、5月の末にはほぼ全ての学生の実習先が決まっていく。

以上のように、本学の実習先の選択から依頼までの流

れをまとめてみた。基本的な流れや体制としては申し分ないが、敢えて課題を挙げるとすればその時期にあると考える。なぜなら、実習指導員として学生の相談に応じたり、学生同士の会話からも聞かれたりする際に顕著に見られたのだが、学生の選択理由の大半が【通いやすさ】を重視している点にある。つまり、2年次の春先ではまだ具体的に実習を行う自分のイメージが確立できていないように感じられる。これが時期を後にずらすことにより、実習に対するイメージがさらに明確になり、結果として保育内容を重視した望ましい実習先の選択がさらに増加する可能性は十分に考えられる。しかし一方で、この問題においても学生による個人差が大きい。実際に【実習指導室】に何度も足を運ぶ学生は過去の実習先の調査も含め綿密に検討をしているが、期間内に一度も相談なく提出のみに来る学生もいる。つまり、時期を変えることで解決できるとも言いきれない。加えて、昨今の実習先の依頼状況（1～2年前に依頼をかけても既に他大学で埋まっていると返答される、実習先の争奪戦の様な状況）に鑑みると、時期の変更が負の影響を与えることも危惧される。

以上のように、依頼から選択までの期間の変更には総合的かつ慎重な判断が求められるが、いずれにしても本学の実習先選択から依頼における指導体制は基本的に保ちながら、学生が葛藤や揺らぎを経て実習先を「選択」する過程に寄り添える体制作りには更なる検討の余地があることが示唆される。

3.【総合考察】

実習に対しては、＜とにかく大変＞という先入観を抱きながら臨む学生も多い。もちろん実習を行うのは容易なことではなく、困難の連続である。しかし、その中でも子どもとのかかわりを通じた多くの体験が、自分にとってのやりがいや自己課題の導出に結び付けられるような実習となるためには、自明ではあるが養成校と保育現場での関係性が重要である。筆者自身、保育現場の立場では、その重要性に意識を向けることがなく、現在養成校の立場として学生を送り出す際にも、実習で困らないような対策（表面的な準備）ばかりに注力してしまい、肝心の実習として臨む姿勢や心構えがおろそかであったように思える。

余談ではあるが、今回の報告の前に2つの幼稚園の管理職の先生に「学生に実習で求めるものは何か」を尋ねてみた。興味深いことに、双方の園とも技術的な面の必要性は一切語られず、学生自身の意欲や態度の面の必

要性が共通して強調されていた点が印象的であった。

今回の報告から浮上した課題をもとに、今後は学生一人一人がより良い実習を迎えられるような双方の良好な関係性の構築に向けた提案を、調査研究等を用いてさらに具体的に模索していきたい。

【参考文献】

- 一般社団法人全国保育士養成協議会（2018） 保育実習指導のミニマムスタンダード Ver.2 中央法規
- 厚生労働省（2017） 保育所保育指針 フレーベル館
- 榊原尉津子・小川真由子・杉山佳菜子（2018） 保育実習の振り返りと自己評価（2）－現場で求められる保育者の資質能力向上を考える－ 鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要 人文科学・社会科学編(1),159-170.
- 塩津恵理子・山口香織（2017） 保育実習指導のあり方を考えるⅠ－実習先（保育所）のアンケート調査から見てきたもの－ 神戸親和女子大学児童教育学研究 36,55-64.
- 鈴木隆（2016） 幼稚園教育実習のあり方について－実習調査から読み取る実習の実態 立教女学院短期大学紀要 48 号,69-80.
- 高木悠哉（2018） 保育者養成課程の実習指導に求められる課題に対する一考察 人間教育 1(3),97-104.
- 高宮明子・中山美佐（2018） 保育実習・教育実習における実習指導室の利用状況と機能：心理的支援、就職支援、学修支援を包括した指導 大阪樟蔭女子大学研究紀要 8,169-178.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017） 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 フレーベル館
- 古川洋子・伊藤亮（2017） 保育者養成校における保育実習事前事後指導の一考察 愛知学泉大学・短期大学紀要(52),85-92.
- 文部科学省（2017） 幼稚園教育要領 フレーベル館